

第2分科会 第1分散会

はじめに

「2016年4月九州熊本の大地が大きく揺れた…(中略)…困難な状況にあってもたじろがず 部落の子を中軸にすえた人権・同和教育は また新たな始まりを迎えた…」で迎えた大会宣言。「自主活動」は、これまで熊本でも大事にされてきた研究課題である。もともと「自主活動」とは、解放子ども会活動等(部落研や外文研など)を出発点に、差別や不合理に気づいた子どもたちが、その解決に向けて要求行動を組織化していくこととして定義され取り組まれてきた。そんな中、この分散会の基調提案を次のように行った。以下に述べるのは、基調提案の概要である。

小学校4年生の時に「自立宣言」をした昌樹。その後、昌樹の姿を通して中学校では昌樹を中心に据えた反差別のなかまづくりが始まる。中学3年生になった昌樹は「進路公開(自分を語る)」の中で次のように語っていく。「何で生まれたところで差別を受けなければいけないのか」と心の底から怒りがこみ上げてきました。と同時に自分を嫌っていました。しかし、それでもがんばれたのは誰かに支えられていたからです。そして、みんなが向き合っていることは、自分が部落差別と向き合っていることと同じです。僕はみんなを本当のなかまだと思っています。でも、絶対に負けません。部落差別に負けず闘っていきます。」と。青年になった昌樹は、今でも「僕にはなかまがいるから」と言い、目の前の就職試験でがんばり、内定をもらうことができました。しかし、進路保障はこれで終わりではありません。彼の自主活動はこれからも続きます。そんな彼を私はこれからもなかまとしてつながっていきます。

本分散会の討議の柱を次のようにして、研究協議を進めてきた。

- 1 子どもたちや親をとりまく差別の現実から何を学び、どのように教育課題につなげてきたかを明らかにしよう。
- 2 子どもたちの自主活動をどのように組織してきたか、人権確立にむけてどのような課題が明らかになったかを交流しよう。
- 3 子どもたちがなかまとしてつながる自主活動をとおして、個々の子どもや集団がどう変わりどんな展望をもてたのか明らかにしよう。
- 4 「子どもの権利条約」の理念をふまえて、子どもたちの要求を受け止める集団の形成をめざし、学校・園・所や地域・家庭・関係諸機関の役割について課題を明らかにしよう

報告の概要と討議されたことについて

(1) 香川県同教 香川レポートからは、1997年から継続している学年ごとの現地訪問学習会を人権学習の柱にし、生徒が主体的に取り組む人権同和教育に取り組まれている。そして、生徒が学んだことや感じたことをクラスに自分の言葉で伝えたり、生徒同士の縦割り学習会、人権だよりを活用され、学びをその場で終わらせるのではなく、振り返り、共有することで、より深いものにしていくという報告がなされた。

討議されたこととしては、レポートにあるように「ただ、知るだけでは差別はなくなりません」とあるがまさにそのとおりである。授業では生徒が前に出て授業を行う姿があげられたが、「結婚差別の授業をしたときに、部落の子どもはどう思ったか。」という子どもたちの本音の部分についての質問が出された。授業の中で、「共感できた」、「いろいろな考え方に触れることができた」、「生かしていきたい」、という言葉だけでいいのかということが論議された。また、「この人権・同和教育に取り組まれていく先生方自身は差別が見えていますか」ということも論議された。もっと部落に家庭訪問に行くことなど部落の子どもたちの把握をはじめとする丁寧な取組を進めていくことが大事なのではということも出された。

(2) 福岡県同教 中島・角田レポートからは、中学生だった中島さんが放送部長として番組製作に関わった。「Like a Rainbow(セクシャルマイノリティ)」の製作の中で、「あたりまえは本当にあ

たりあえか」と問いかけ、単に差別はいけませんでは伝わらないと考え当事者の方から学び、製作を通して中島さん自身が変容してきたことを報告された。

討議されたこととしては、なぜ LGBT について製作しようと思ったのか、そのきっかけが問われた。クラスでホモやレズと言った言葉を使って人を傷つけていること、きっかけは人権教護委員の人からの勧めもあったが、この番組製作に関わって、ますます LGBT について考えようになったこと、そして私たちの身近にもいるということで、私たちが正しく知り、正しく行動することの大切さを再確認しながら論議することができた。この作成された DVD は他でも学習として使用されているとのことであったが、LGBT についての表現の仕方や認識について、フロアから現状にそぐわない部分を指摘していただくところもあり、参加者にとって深い学びの場となった。

- (3) 大阪市人教 足立・松本レポートからは、子どもたちにとって多文化共生が息づく「ふるさと」でもある「猪飼野」。この地域のくらし、歴史に学ぶ地域学習を発信した学習に取り組まれている。その中でも日本人児童を対象とした「ユネスコタイム」は子どもたちが自分のくらしや差別の現実を見つめることを通してなかまとどのようにつながっていったかが紹介された。そして、授業を創造することから、今日職員自身がどう変容していったかが報告された。

討議されたこととしては、「本名で名乗ること」についての問いかけや意見が出された。そして、在日韓国人の夫を持つ方から、「小学校のときに本名で名乗っていたが、中学校では日本名を名乗った。そのときに中学校からは、なぜ本名で名乗らないのかと聞かれる。名乗れない背景とは、授業中に『だまれ韓国人』と差別される側に立たされたこと。だから傷つきたくないから話したくない。」という胸の内を話された。「本名を名乗ること」は「立場宣言」でもある。小学校では、「本気」と「覚悟」を持って子どもたちと関わる御幸森小の先生たちの姿があった。要は教職員が差別をしっかりと見ているのか、そして差別をなくすなかまをつくっているかということも論議の中で見えてきた。

- (4) 東京都同教 戸田レポートからは、南定会（卒業生の会）に携わる報告者自身が自分自身のこれまでの生き立ちや人との出会いを振り返り、演劇に取り組まれた。部落出身である T に対して同級生として、そして今では教師として関わる報告者が、嫌なことがあると逃げようとする T に対して、この演劇を通して向き合ってほしいという願いを持ち、T ととことん関わっていかれる姿があった。

討議されたこととしては、報告者自身が部落と出会ってどう変わったかという質問に対して、「自分自身に正直になれた」と答えていく。そして T については「厳しい差別の現実の中で必死に生きている。私たちにとって当たり前のことが当たり前ではない。しかしそれでも必死に答えたいこうとする姿を部落研のなかまがずっと T を支えてきている。」と自分のこれまでの生き方と重ねながら答えられた。また、南葛のこれまでの歴史（差別と闘っていくために取り組んできたこと）についてもフロアから説明があり、南葛に今、再び同和教育の灯が再灯しかけていることや、南葛の取組を広げていこうとされている教職員の姿の紹介もあった。

論議と交流の中で

- (1) 長野の方からは、「学校総体として人権問題について取り組み、学習したことは評価できる。しかし、知識だけではなく、行動まで行かねばならない。昨年の全人教長野大会では、部落出身の方が、自分自身が受けてきた部落差別の厳しさが語られる報告もあった。自分自身を差し出し、部落の人たちのしんどさに答えていく実践をしていかないといけないのでは。」という意見が出された。教職員は差別は本当に見えているのかということも含めて、根幹の部分のことが出された。
- (2) 大阪の方からは、「冬に、外から教室へ入室した女の子に対して、男の子が『朝鮮人のくせに』とストーブに当たることを批判した。実は男の子と女の子は両方とも在日の子どもである。つまり、男の子は自分が在日であるということを知らないのである。このことは学級全体の問題で話をしたいと思った。しかし他の教師から『本名を知らんのやから仕方ない』と言われる。

このとき、本名を名乗ることの大切さを痛感した。大会宣言文の『かけがいのない私があるのままに・・・』御幸森小の教育実践・授業の中にそれが表れていたことが嬉しい。」と本名で名乗ることの大切さを伝えていただいた。

- (3) 和歌山の方からは、「性の問題は全ての人の問題である」との発言があった。さらに京都の方からは「出生時の『性別』と自分がありたい『性別』でのしんどさがある。」との発言があった。当事者のしんどさ、苦しさにしっかりとアンテナを張ること、そして知ることの大切さが伝えられた。

残された課題

- (1) 報告から、取組に対しての子どもの姿（事実）が具体的に見えなかった。
(2) 部落差別、性的マイノリティ、在日問題など差別問題については論議できたが、個々の議論については論点が定まらなかった。
(3) 報告や論議の中で、自主活動という言葉の捉え方を確認する作業が必要である。

第2分科会 第2分散会

討論の概要

本分散会では、「差別の現実は何を学び」「どの位置に立ち」「子どもたちの立ち上がりはどうつなげていくか」を明らかにすることができるように、討議課題の中から3つの柱を立てた。フロアからの意見も多く、熱心な討議が行われた。

①「東葛同研の活動と課題」

千葉県同教（東葛同和教育研究会）友兼善治さん、今井勝さんの報告からは、子どもに寄り添い、かわり続ける中での子どもの変容や自らの中にある差別性への気づき、今後の課題などが報告された。しんどい暮らしの中にあっても輝きを失わない人の優しさ、そして被差別の立場に置かれたその子たちこそ人とのつながりを求め続けていくのだという仲間づくりの根っこが明らかになった。これからも子どもたちに寄り添い、そこから学んだことをそれぞれの職場で目の前の生徒たちに返していこうとする姿勢が伝わった。自分の立ち位置を常に問い、自分の甘さにも常に厳しく向き合うこと、子どもを信じ抜くこと、そして、差別を絶対に許さないこと、東葛同研がめざしている方向性を感じることができた報告だった。

論議・交流の中で「部落研での学びの中身は」「部落研で地域の差別の現実の掘り起こしを進めているのか」「差別発言の時、学校は何をしたのか、背景は何だったのか」などの質問が多く出された。お二人は、技術論ではなく、とにかくとことん子どもに寄り添い続けている。そんなお二人がいる部落研だからこそ、OB・OGが何年たっても集まってくるのである。差別の現実から学び、とことん子どもに寄り添う姿勢は、私たち全員で共有していかなければならないと感じた。

②「先生、部落って何ですか」～立ち上げた子ども会、そこに座り続けることで～

埼玉県人教（上尾市立原市中学校）岩崎正芳さんの報告は、岩崎さん自身が、部落とどんな出会いをし、何を感じ、自分の生き方をどのように変えてきたのだろうということを考えさせる内容であった。「T、このむらに生まれてきて良かったなあ。先生も一緒に歩んでいきたい」という教え子のTさんに向けられた言葉からもそのことを感じた。Tとのかかわりの中から被差別の子どもたちをつなげる大切さに気づいた岩崎さんの、様々な課題を抱えるS、I、Wをつなげ、居場所をつくりたいという思いを感じることができた。

論議・交流の中で話題に上った、Tさんの「僕と同じ部落の仲間はいないんですか」、Iさんの母親の「先生、部落って何ですか」「先生の中にあるキラキラした部落って何なんんでしょうか」という言葉は、まだまだ被差別の側の思いが十分に受けとめきれない私たちへの厳しいつきつけでもあった。今もIさんとつながり続けようとしている岩崎さんにも課題はまだまだ山積していることが明らかになったが、「とにかく子どもたちを裏切らない生き方をしていきたい」「子どもと一緒に歩いていくこ

とを自分の人生でお伝えできたと思う」という言葉から、報告者の今後の実践への覚悟を感じた。

③「思いを伝え、心をつなぎ合い、ともに輝き合う児童をめざして」

徳島県人教（美馬市立木屋平小学校）阿部幸美さんの報告では、子どもたちがふるさとを誇れるようになるには、そのふるさとを守り続けている人々の真実の思いにどれだけ出会い、心の深いところで受けとめられるかが鍵だということが明らかになった。一人ひとりがかけがえのない存在だという地域の人々の思いが感じられ、こうした地域の教育力に支えられて木屋平小学校の自主活動は存在していた。

論議・交流の中で出された「地域の人権課題は何なのか」という問いに阿部さんは、明るく元気に学校を支えながらもその思いの奥には人口流出が止まらない木屋平の現実の中で常に「学校がなくなるかもしれない」という悲しみがあるということを返した。この返しを聞いたとき、木屋平の人々がなぜここまでふるさとの美しさや、やさしさ、相互扶助の精神を子どもたちに伝えようとしているのかが明らかになった。人々のやさしさはこの悲しみを乗り越えようとしている、実は強さなのだということが分かった。阿部さん自身が自分のふるさとである木屋平への思いと部落問題をつないでいくことで、木屋平小学校の子どもたちが自分のふるさと同様に他者のふるさととも大切に思い、部落差別をなくしていく感性と強さをもちうる自主活動へと高まっていくと考えられる。

④「生き方につながる部落問題学習を」

大阪府人連（貝塚市立第二中学校）松本了一さんの報告から、どの子も絶対に見放さないという学校の強い決意、そしてその決意を裏うちする地域や保護者とのつながりの持ち方、そして何よりもそれらが確実な子どもたちの変容につながっているという決してブレない実践の筋道が明らかになった。

論議・交流の中でも話題にのぼった荒れを見せていた生徒 A。何もかも暴力で解決しようとしていた A に対して松本さんたちがとことんかかわったことやヒューマンライツという反差別の仲間づくりの場で自分と同じような境遇に育った地域の先輩の話聞く中で A は変わっていった。「この学年をけんかや暴力のない学年にしたい」と綴った A の気持ちは本物であり、もう一人の荒れを見せていた B の変容にも A が大きく関わっていった。友だちがどんどん離れていった B に対して「おれは友だちだから」と寄り添い続けた A の優しさが語られた。そこにたどり着くことができたのは、貝塚二中の教師集団が「子どもたちは必ずつながる」「子どもたちは必ず変わる」という信念でブレずに子どもと向き合ってきたからだと感じた。

教訓的な事柄

- 「他者の痛みを自分の痛みとして感じるができる感性をはぐくむこと」、そして「他者のふるさとを自分のふるさとと同様に愛せる感性をはぐくむこと」、さらには「他者の尊厳を傷つける差別を主体的になくしていく実践力をはぐくむこと」、それが本分散会に問われ続けた差別の現実に深く学ぶことの具体的な検証軸であり、同時にめざすところでもある。
- 自分の内面を深く見つめ、差別と自分がどう向き合ってきたのか、これからどう向き合っていくのかという自身の立つ位置を厳しく己に問いなおしながら、誠実に実践していくことが大切である。
- 自分にとっての自主活動とは何なのか、それを問うことが私たちに不可欠なのである。
- おとなが子ども一人ひとりに寄り添い、つながり続けていくこと。子どもが自分のこととして同和問題を語り合う場が必要であり、大事なことはそれを受け止めてくれる仲間がいるかどうか。差別と向き合い、仲間とつながって生きていくことが豊かな生き方につながる。だからこそ仲間づくりを大切にしなければならぬ。

今後の課題

- 親や子どもたちの生活や思い（しんどさ）をどうとらえ、具体的にどう支えているか。
- 教職員の立ち位置（かかわり）が問われ続けている。
- 自分の大切な思いを語ることは大切だが、その質・中身が問われている。
- 学校総体での取組があまりにもシステム化（マニュアル化）されていくとその取組の出発点である差別の現実が遠い存在になってしまっていないか。